

平成 30 年 6 月 6 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03007

研究課題名(和文)近代日本のコロニアルツーリズムと植民地体験に関する歴史地理的研究

研究課題名(英文)A historical geography of modern Japanese' colonial tourism and experiences

研究代表者

米家 泰作(Komeie, Taisaku)

京都大学・文学研究科・准教授

研究者番号：10315864

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：近代の朝鮮半島・中国東北部は、日本の植民地やそれに準じる地域であっただけでなく、当時の日本人にとって最も主要な海外旅行先であった。そこで展開したコロニアルツーリズムは、近代日本の植民地主義や帝国主義と深く関わっている。本研究では、旅行者が執筆した旅行記や参照した地誌類と、訪問地の側で旅行者を受け入れるために作成された様々な資料を検討し、朝鮮半島と中国東北部への旅行経験がもつ意味を探った。その結果、旅行者たちは、前者を帝国日本の(後進的な)一部として経験しながらも、後者をロシアに対峙する前線として経験し、オクシデンタリズムの場所として位置づけたことが見いだされた。

研究成果の概要(英文)：Modern Korea and north-east China were parts of (semi-)colonies of the Japanese Empire and most major destinations of overseas journey from the mainland of Japan. The colonial tourism to those areas were incorporated with the Japanese colonialism and imperialism. Analyzing travel writings the tourists published, geographical descriptions they referred, and materials made in the tourist destinations, this study focuses on what roles tourists' experiences played in the empire. It is found that colonial travelers experienced Korea as a (stagnant) part of the empire while north-east China became the front line to Russia and a place of Occidentalism.

研究分野：歴史地理学

キーワード：旅行記 心象地理 地誌 朝鮮八景 哈爾濱 朝鮮半島 中国東北部 ロシア

1. 研究開始当初の背景

近代を対象とする歴史地理学において、最も重要な研究テーマの一つが、帝国主義ないし植民地主義が果たした役割である(例えば、R. A. Butlin、*Geographies of Empire*、2009)。そのなかで、植民地の「後進性」を焦点とする宗主国側の心象地理とその体験のあり方は、帝国主義を支える重要な要素として、研究者の関心を集めてきた。

このような関心に立った諸研究は、1990年代まで、E. W. サイドのオリエンタリズム論に強い影響を受けていたが、次第に西洋／東洋の二項対立的な構図からは離れ、グローバルなネットワークのなかで生じた複雑な植民地理解と体験のあり方へと焦点を移している。そこでは、複数の植民地と宗主国を結ぶネットワークを通じて、理解や体験が還流し、それがさらにフィードバックする「地理の帝国」の過程に、関心が寄せられるようになった。

その結果、学術や行政によって生産された知識の主導的な役割を認めつつも、そこから展開した植民地の理解や体験のあり方は決して一枚岩ではないこと、また植民地化する側の立場にある宗主国側の人々も、アイデンティティは多様であって、植民地における現地とのコンタクトのあり方も異なることが議論されている。

以上のような研究動向を踏まえて、報告者は近代の日本統治期の朝鮮半島に関して、森林環境および史蹟景観に着目し、近代日本人の理解と体験を検討してきた。当初、報告者の関心は、どちらかといえば学術や行政によって生産された知識が果たした主導的な役割にあったが、そのような視点ではすくい取れないような様々な理解や体験があったことにも、否応なく気づかされることになった。

そこで報告者は、近代日本のコロニアルツーリズムが最も典型的に展開した朝鮮半島と中国東北部に着目し、学生や実業家、その他の観光客など、様々な属性の日本人が植民地をどのように訪問し、理解し、体験したのかを検討する研究に着手した。かつて朝鮮半島と中国東北部への旅は、「鮮満旅行」あるいは「満鮮旅行」と称され、日本人にとっては最も身近な海外旅行であった。

この「鮮満(満鮮)旅行」を含め、近代日本のコロニアルツーリズムに関しては、すでに概説的な研究は蓄積されており、文学史や教育史からも研究が進展している。また地理学においても、主に文化地理学者からの検討が試みられている。しかしながら、いずれも限られたガイドブックや旅行記に依拠して、植民地の理解や体験をサイド的な二項対立的な枠組みで捉える傾向が強いか、あるいは個別の旅行事例の研究から抜け出せないことが、課題となっていた。

そこで報告者は、旅行記の資料的意義を確立するために、目録化と旅程のデータベース

化を含む基礎的な作業を進めたが(米家泰作「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究—鮮満旅行記にみるツーリズム空間—」、京都大学文学部研究紀要 53、2014年、319-364頁)、旅行者の理解や体験の検討が課題として残されていた。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえて、本研究では、近代の朝鮮半島と中国東北部で展開した近代日本のコロニアルツーリズムに関して、これらの地域で日本人の旅行体験と植民地理解がどのように形成・展開したのか、またそれが、宗主国からの訪問者向けに進展していた観光地化とどのように関わっていたのか、明らかにすることを目的とする。なお、本研究では、「満洲国」が成立した中国東北部を、植民地に準じる地域として扱うものとする。

上記の目的にせまるにあたっては、旅行者の時期や属性に由来する「鮮満(満鮮)旅行」体験の共通性と多様性に留意し、その広がりの中にある植民地主義的な心象地理の形成を丁寧に議論する。その点に留意して、本研究では、個々のガイドブックや旅行記を個別に分析するというやり方よりも、主要な旅行訪問地に着目し、そこを訪問した旅行記を通時的に検討するとともに、観光地化の進展ないし現地の受け入れ体制の組織化と関連づけることで、旅行体験の特質とその変化を浮かび上がらせることに主眼を置く。また、実業家や教員、行政といった旅行主体の違いにも留意する。

また、ヨーロッパ諸国が植民地で展開したコロニアルツーリズムと、近代日本のそれとの異同を捉えることも、本研究においては重要な課題となる。ヨーロッパ諸国の場合、多くは宗主国からは空間的にも文化的にも離れた植民地がツーリズムの対象となり、「遅れた」他所で「劣った」他者に会おうというオリエンタリズム的な構図がはっきりしやすいことが特徴であった。

これと比較して、隣接する諸地域を植民地化した日本においては、植民地を単純に他者化するのではなく、日本との同質性や共通性を強調し、「過去の日本」のとして包摂ないし「自己化」する傾向も認められる(米家泰作「『近代』概念の空間的含意をめぐって—モダン・ヒストリカル・ジオグラフィの視座と展望—」、歴史地理学 54(1)、2012年、68-83頁)。

先行研究ではこの点が必ずしも十分に注意されていないが、日本に隣接する朝鮮半島と中国東北部に着目する本研究では、ヨーロッパ諸国のコロニアルツーリズムとの異同に留意し、朝鮮半島と中国東北部の差異にも注意しながら、近代日本の特徴を議論することも、課題となる。

3. 研究の方法

近代の朝鮮半島と中国東北部で展開したコロニアルツーリズムにおいて、主要な訪問地となった都市や地域を選定し、旅行者の体験と理解を旅行記から抽出するとともに、その訪問地で展開した受け入れ側の組織化や施策を関連出版物から検討し、両者の連関を検討することが、本研究における基本的な研究方法である。

具体的には、前掲拙稿（「近代日本における植民地旅行記の基礎的研究」）によれば日本人訪問者が突出して多かった10都市、すなわち釜山、京城（現ソウル）、平壤、安東、大連、旅順、奉天（現瀋陽）、撫順、長春（新京）、哈爾濱（ハルピン）に注目し、それぞれの都市で進展したツーリズム受け入れの動向を示す資料を収集した。そのために、国内においては国会図書館、東洋文庫、学習院大学などで文献調査を進め、また古書（旅行記・ガイドブック・ガイドマップ・絵葉書など）の収集に努めた。

こうした作業を経た上で、より重点的に検討したのが以下の諸点である。

朝鮮半島においては、1935年に行われた新聞社による「朝鮮八景」選定事業が、コロニアルツーリズムの振興と同時に、植民地の諸都市・地域を帝国日本の観光地として「自己化」する意味合いを帯びていたという点で、興味深い事例である。本研究では初年度において、特にこの事業に着目し、朝鮮半島内のツーリズム振興との関りについて検討した。

また、報告者にとって幸運なことに、韓国の歴史地理学者で報告者と関心を共有する丁致榮教授（韓国学中央研究院）が、2016年に在外研究のため京都大学に滞在された。丁教授は、1925年・1932年に全国中等学校地理歴史科教員協議会が実施した鮮満旅行の検討を希望され、報告者もその分析を支援することができた。

さらに朝鮮半島に関しては、丁教授の関心に触発され、朝鮮の地理をめぐる日本側の知のあり方を捉えるべく、地誌類を網羅的に通覧し、地理的知が急速に体系化する様相を捉える作業を行った。これらは、旅行者が事前に知り得る基礎的な知識を押し量る上で、重要な意味をもつといえる。

一方、中国東北部に関して、報告者は特に哈爾濱（ハルピン）に着目することとし、2017年には柴田陽一氏（撰南大学）の協力を得て、現地調査を実施した。そこで、文献調査を行うとともに、日本人訪問者の主要な周遊地の現状を確認することができた。近代の哈爾濱が日本人の訪問地として独特な意味をもっていたことについては、すでに先行研究の指摘があるが、本研究では、観光地化が進む依然からの旅行記を通時的に検討し、現地のツーリズムへの取り組みの変遷について、総合的に捉えることができた。

4. 研究成果

「鮮満（満鮮）旅行」と称された近代の朝鮮半島や中国東北部への旅行は、近代日本のコロニアルツーリズムを考える上で、最も重要な事例となる。以下では、朝鮮半島と中国東北部のそれぞれについて、本研究が得た知見の要点について、両者を対照させながら整理する。

まず朝鮮半島に関して、次のグラフは朝鮮半島への地誌・紀行ならびに関連するジャンルの出版点数の推移を示している（詳細は次項図書①参照）。これらの出版物は次第に漸増して日韓併合の年（1910年）を迎えたわけではなく、紛争や戦争のたびに惹起した地理的関心に応じて、断続的に突出したピークがあり、日韓併合以降、出版が持続的にみられるに至る、という傾向があった。

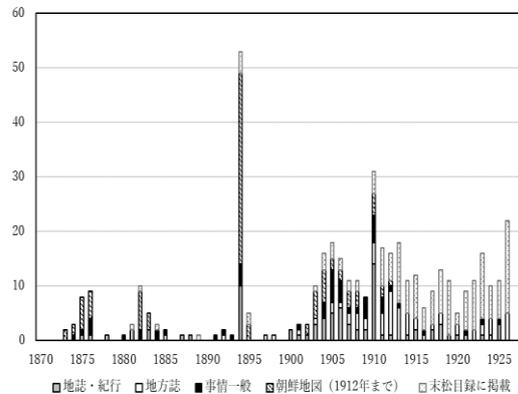
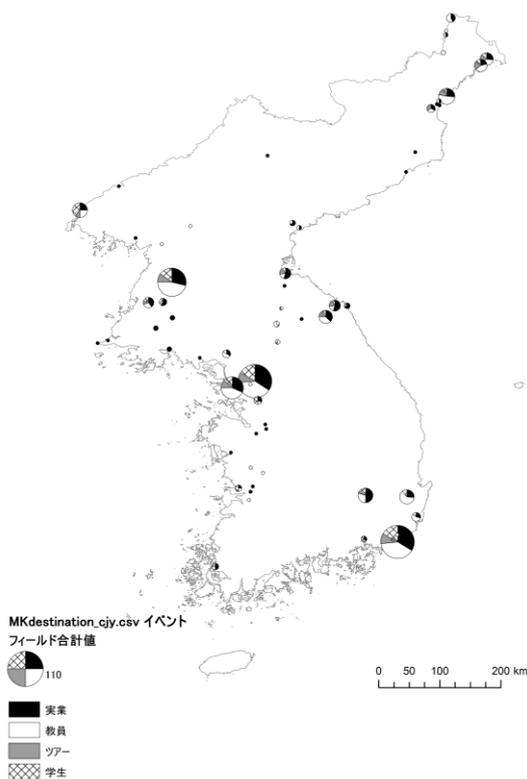


図1 地誌・地図類の出版点数の推移

豊井(1870)・末松(1880)による。ただし地誌・紀行のうち雑誌掲載の論文(1点)と、末松目録のうち内地への紀行(2点)は除いた。

こうした地誌・紀行類は、20世紀に入る頃より、限られた古い知識の焼き直しでは無く、近世朝鮮の地誌の流用や、執筆者による実際の体験を踏まえて、体系化していく。それはより実業や拓殖、行政にとっての「実用的」な地誌へと発展する面をもちつつも、矢津昌永や田淵友彦のような地理学出身者によって、地理学的な観点を備える側面もあった。ただし、それらが客観的・中立的な朝鮮理解をもたらしたわけではなく、むしろ地理的植民地論を用意するものであったことに、注意が必要である。

日本の植民地期においては、様々な人々が「鮮満（満鮮）旅行」のなかで朝鮮半島を訪れたが、そのなかで中学・高校の地理の教員が果たした役割にも注目しておく。彼（女）らはコロニアルツーリズムを構成する旅行者であると同時に、その体験を生徒に伝える立場にあった。しかし、こうした教員が訪れた都市や地域は、多くの旅行者と変わりなく、鉄道で訪問できる諸都市を駆け足でめぐるのが多い（刊行旅行記の訪問地を示した次ページ左段の図を参照）。1925年・1932年に全国中等学校地理歴史科教員協議会が企画

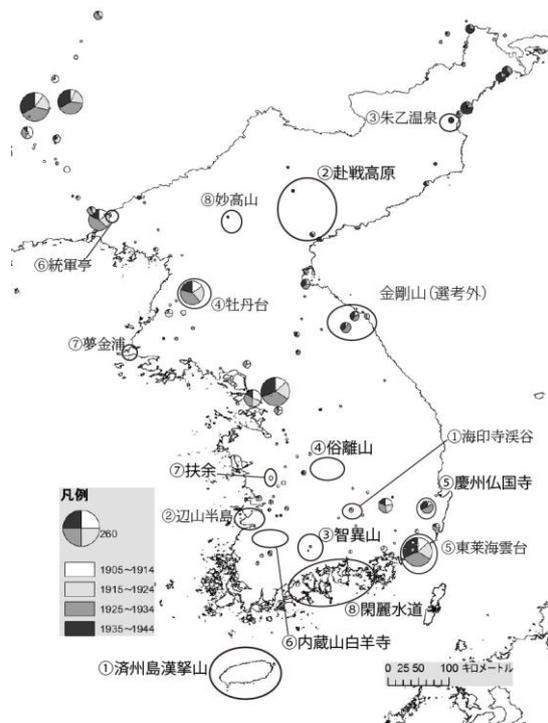


した旅行では、歴史分野に関わる訪問地が多いことを除けば、訪問先やそこでの体験に、地理教員ならではの特徴が際立っていたとはいえない（詳細は次項論文①参照）。むしろ日本と似た環境や文化に着目しながらも、ことさらに遅れた点を見いだす視点からは、「他者化」と「自己化」がない交ぜになった理解を、見いだすことができる。

1935年に大阪毎日新聞（朝鮮版）が企画し、朝鮮総督府の全面的な協力の下に選定された「朝鮮八景」は、日本内地からのコロニアルツーリズムを促す意図をもったメディアイベントとして位置づけられる。そこでは、特定の都市に固定しがちであった旅行者の周遊地に、新たな観光地を付加し、これを帝国の観光地として位置づける目論見を見取ることができる。

候補となった土地や地域は、投票数を競って加熱し、コロニアルツーリズムの目的として発展することを期待した（最終的に決定した八景八勝については、右段上掲の図を参照。また詳細は、次項図書②を参照）。ただし、そこで称揚された「郷土愛」は、日本本国に対する朝鮮の独立を促すものは認められず、あくまで帝国内部の観光地開発として位置づけられ、帝国の発展や自然美と結びつけられた。

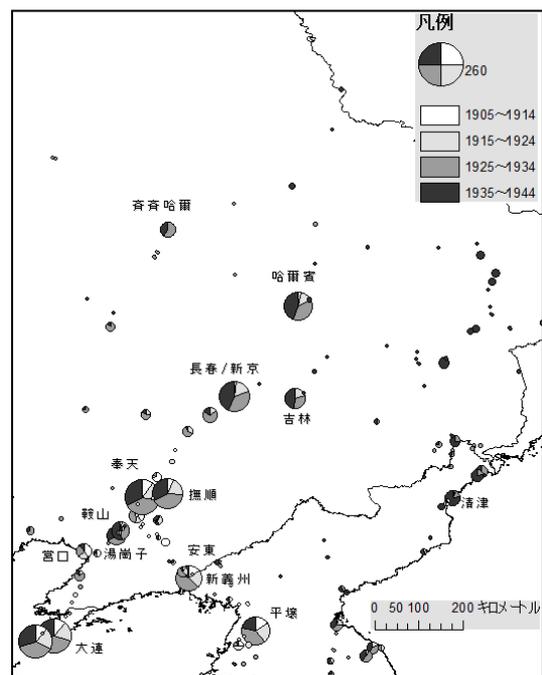
この「朝鮮八景」選定からは、帝国と郷土という二重の空間的なスケールが、摩擦を起こさないように、しかし巧みに表裏一体のものとして植民地の景観に埋め込まれようとしたことが窺われる。ただし、結果的にその後の帝国日本は戦時期を迎え、ツーリズムそのものが抑制され、上記の目論見は実現しな

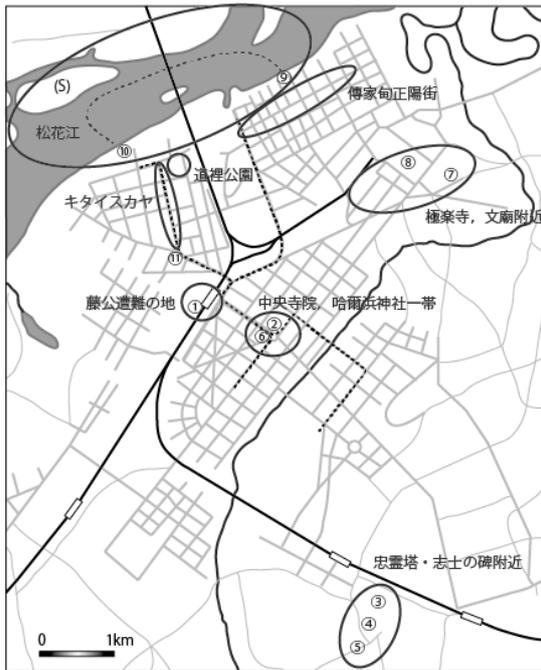


いまに終わったといえる。

次に中国東北部に関して、本研究では幾つかの都市を予備的に検討した上で、日本のツーリズムの最北端の主要目的地となった哈爾濱に着目した。そこで以下ではコロニアルツーリズムからみた近代の哈爾濱の特徴について、要点を素描しておく。

刊行旅行記の訪問地を表した下の図が示すように、哈爾濱（哈爾濱）が日本人の主要な旅行先となるのは1920年代半ば以降である。1932年に「満洲国」が成立し、1935年に北滿鉄路（新京-哈爾濱）を買収すると、多くの日本人旅行者にとっては鮮満周遊の北端となり、1937年には哈爾濱観光協会が設立された。





ロシアによって建設された計画都市である哈爾濱は、「満洲国」成立以前、ロシアの強い影響下にあった。初期の旅行者は、ロシアが建設した近代都市・哈爾濱を評価しつつも、ロシアへの対抗心を強調し、伊藤博文暗殺や日露戦争にまつわる場所を積極的に訪問した。後者は在住日本人の手によって、次第に史跡として整備され、「志士の碑」などが設置されることになる。

ロシア革命によって、次いで東清鉄道の売却によって、ロシアの影響力が失われた後も、教会や墓地はヨーロッパ的な景観として観光コースに組み込まれた。とりわけ歓楽街（キタイスカヤ）のロシア人女性は、ヨーロッパに対する憧憬と優越感を与えるアンビバレントな存在として、もてはやされた。

上図は、観光協会が設立された 1930 年代後半の観光バス周遊地を示したものである。ロシア（ソ連）への対抗および帝国日本の拡張を象徴する要素（①③④⑤）と、賞翫・消費の対象としてのロシアないしヨーロッパ的な要素（②⑥⑧⑩⑪）が、混在していることがわかる。そのなかで、中国的な要素（⑦⑨）が占める比重は小さかった。

その意味で、日本の植民地圏の最西北に位置する哈爾濱は、他者化や自己化というよりも、帝国日本が対峙するもう一つの帝国・ロシアに対する歪んだオクシデンタリズムを体験しうる場所として、機能したといえる。この点は、他のヨーロッパ諸国には見られない特異な点であり、近代日本のコロニアルツーリズムの大きな特色であったといえる。

以上、簡単ながら成果を整理したが、資料を収集しつつも、まだ十分に分析を進めていない都市や地域が残されている。特に、平壤、奉天（現瀋陽）、撫順、齊齊哈爾の検討が今後の課題であることを付記しておく。

5. おもな発表論文等

〔学会発表〕（計 1 件）

- ① 丁致榮・米家泰作「1925 年・1932 年の日本の地理・歴史教員らの韓国旅行と韓国に対する認識」（韓文、査読有）、『文化歴史地理』（韓国文化歴史地理学会）、29(1)、1-20 頁

〔学会発表〕（計 3 件）

- ① 米家泰作「昭和 10 年の『朝鮮八景』選定とコロニアル・ツーリズム」、2016 年日本地理学会春季学術大会、2016 年 3 月 21 日、早稲田大学
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2016s/0/2016s_100189/_article/-char/ja/
- ② 米家泰作「近代日本における朝鮮地誌の出版とその系譜」、2017 年日本地理学会春季学術大会、2017 年 3 月 28 日、筑波大学
https://www.jstage.jst.go.jp/article/ajg/2017s/0/2017s_100035/_article/-char/ja/
- ③ 米家泰作「コロニアル・ツーリズムと哈爾濱—帝国の前線と『ロシア』体験—」、2018 年日本地理学会春季学術大会、2018 年 3 月 22 日、東京学芸大学

〔図書〕（計 2 件）

- ① 米家泰作「明治・大正期の地理的知—朝鮮半島の地誌と旅行記をめぐって—」、森修編『明治・大正期の科学思想史』勁草書房、2017 年、169-220 頁
- ② 米家泰作「昭和 10 年の朝鮮八景選定—コロニアル・ツーリズムの景観—」、金田章裕編『景観史と歴史地理学』吉川弘文館、2018 年、266-297 頁

〔産業財産権〕

- 出願状況（計 0 件）
- 取得状況（計 0 件）

〔その他〕

特になし

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
米家 泰作 (KOMEIE、Taisaku)
京都大学・文学研究科・准教授
研究者番号：10315864
- (2) 研究分担者
なし
- (3) 連携研究者
なし
- (4) 研究協力者
柴田陽一 (SHIBATA Yoichi)